

談 話 室

第 28 回日本眼科学会専門医認定試験を終えて

第 28 回日本眼科学会専門医認定試験は平成 28 年 6 月 10 日(金)と 11 日(土)の 2 日間にわたり、例年同様、試験会場としては必ずしも適当ではないかもしれない東京の渋谷駅近くにあるフォーラム 8 で行われました。今回の認定試験の結果を中心にご報告させていただきます。

1. 概 要

試験は平成 28 年 6 月 10 日(金)の午前 9 時 30 分から一般問題を、午後 1 時から臨床実地問題の筆記試験を行い、翌 6 月 11 日(土)の午前 9 時からは受験者 1 名につき約 15 分をかけて口頭試問を実施しました。

2. 受験者数について

受験申請の受理者の数は 254 名、試験当日の欠席者 6 名で、最終的に 248 名(男性 149 名、女性 99 名)が受験しました。これは平成元年に行われた第 1 回の受験者数 220 名に次いで少ない数となりました。9 年前の第 19 回の試験の際は 592 名の眼科医が受験しておりましたので、眼科を志す医師が本当に減少してきたことを実感させられる数字といえます。ただし、この減少傾向にもそろそろ歯止めがかかるであろうことが予想されています。

なお、本年の 248 名の受験者のうち、初回受験者数は 185 名(74.6%)、再受験者数は 63 名(25.4%)で、この比率はほぼ例年通りでした。

3. 問題数、平均点、合否判定、合格率、ほか

筆記試験問題は一般問題 100 題、視覚素材付きの臨床実地問題 50 題の計 150 題で行われ、試験終了後、速やかに KV(key validation)委員会を開催し、正答率と識別指数を参考に問題の妥当性を検討しました。その結果、一般問題のうち 2 問を、臨床実地問題のうち 3 問を不適切問題と判断し、採点から除外し、一般問題と臨床実地問題をそれぞれ 100 点満点として計算し直し、両者の合計を加算して 200 点満点として採点しました。今回の採点結果と過去 3 年間の結果を表 1 に示します。このように受験者の平均点としては、ここ数年とほぼ同様の結果となりました。

口頭試問については例年通り、まず試問の前夜に試問委員全員で実施手順の確認を行いました。そして試問当日の早朝 7 時に委員全員に対して問題を開示し、副委員長から試問の目的と方法を説明していただき、

表 1 筆記試験成績

回		一般問題 (100 点満点)	臨床実地問題 (100 点満点)	総合 (200 点満点)
26	最高点	89.8	96.0	180.7
	最低点	25.5	36.0	66.6
	平均点	62.3	73.7	136.0
27	最高点	84.4	93.9	174.1
	最低点	25.0	42.9	79.4
	平均点	59.2	71.9	131.1
28	最高点	92.9	95.7	184.4
	最低点	30.6	38.3	74.0
	平均点	63.7	69.6	133.3

表 2 最近 3 年間の初回受験・再受験別合格率

回	年	初回受験者	再受験者	総合合格率
26	2014	86.4%	37.8%	75.0%
27	2015	86.6%	41.5%	73.6%
28	2016	84.9%	30.2%	71.0%

議論を重ねたうえで合否判定基準について委員全員のコンセンサスを得ました。毎度のことですが、試験委員会の責任者は受験生並みに緊張を強いられる時間帯です。

口頭試問は 2 名の委員が一組となって評価を行いました。最終的な合否判定は、試問翌日の 6 月 12 日(日)に口頭試問の各班の班長と試験委員会委員長、副委員長による判定会議の場で行いました。まずは口頭試問の問題の評価、各班の受験者の状況や反応について班長全員から報告をしていただき、その意見をもとに合否判定基準の再確認を行いました。その後、口頭試問の不合格の候補者について班長の報告を受け、改めて全員で検討し、合否判定を行いました。

最終的な合格基準は例年通り、筆記試験が 200 点満点で 120 点以上、かつ口頭試問に合格した場合としました。

その結果、合格者は 176 名となり、最終的な合格率は 71.0% となりました。最近 3 年間の初回受験者と再受験者と合格率を表 2 に示します。今回は初回受験者の合格率 84.9%、再受験者の合格率は 30.2% でした。

4. 筆記試験問題の作成について

筆記試験問題の作成は全国の指導的立場におられる79名の出題委員に依頼し、一人当たり一般問題2題以上、臨床実地問題3題以上の作成をお願いしました。残念ながら、ごく一部にご協力をいただけなかった先生もおられました。必要な問題数を集めることができませんでした。出題してくださった先生方には心から御礼申し上げます。なお、不採用となった問題にはそれなりに理由があり、例えばどんなに良問であっても過去1, 2年以内にまったく同じ内容、あるいは似たような視覚素材を用いた問題が採用されている場合には不採用となってしまいますので、何卒ご了承のほどお願い申し上げますとともに、是非とも直近の問題に目を通していただければ幸いです。

試験問題作成の実際ですが、各先生方から提出していただいた540題の問題をもとに専門医試験委員会の先生方と計6回にわたって選定およびブラッシュアップ作業を行い、全体のバランスを考慮しつつ最終的に150題に絞り込みました。毎回、担当の委員の先生方には精神的にも肉体的にも堪える長時間の作業にご協力いただき、感謝申し上げます。

5. 口頭試問

口頭試問は12名の試験委員に出題を依頼し、提出していただいた24題の問題をもとに2題を選定し、15分間の試問に見合うように修正や可否判定基準を検討し、最終案をまとめました。

本年の問題1は円錐角膜の症例を提示し、角膜形状の検査結果に対する解釈や治療法を問う問題、問題2は最近の学校保健安全法施行規則の一部改正に伴い、眼科医として改めて適切な対応が求められている色覚検査について問う内容でした。その目的は、検査方法と評価に関する基礎的知識はもとより、進路相談などに際し眼科専門医として適切な指導を行うことができるか否かにウエイトを置いた試問としました。

6. 今後の試験に向けて

2014年に日本専門医機構が発足し、来年(2017年)には新しい専門医制度への移行が始まるとの話があります。諸般の事情により先行きが怪しくなっていますが、今後、専門医制度がどのように変わろうとも、眼科の試験に関しては、これまで30年近くにわたって培われ、一定の成果を挙げてきた現行のシステムが当面の間は継続されることと思います。

7. おわりに

毎年、専門医試験に臨む受験生の苦労は大変なものがあると承知しております。一方、その準備と実施においても途轍もなく長い時間と労力が費やされています。試験問題の作成に始まり、筆記試験の試験監督、口頭試問に関わられた全国の先生方、昨年からは副委員長をお願いしております平形明人先生、本部でサポートしていただいた高橋寛二先生、そして日本眼科学会事務局のスタッフの皆様にご心から御礼申し上げます。